

聖霊降臨後第20主日（10月2日の聖書箇所）

I 第一朗読（ハバクク1章2―3節・2章2―4節）

- 2 主よ、わたしが助けを求めて叫んでいるのにいつまで、あなたは聞いてくださらないのか。わたしが、あなたに「不法」と訴えているのにあなたは助けてくださらない。
- 3 どうして、あなたはわたしに災いを見させ、労苦に目を留めさせられるのか。暴虐と不法がわたしの前にあり、争いが起こり、いさかいが持ち上がっている。

- 2 主はわたしに答えて、言われた。「幻を書き記せ。」

走りながらも読めるように板の上にはつきりと記せ。

- 3 定められた時のためにもうひとつの幻があるからだ。それは終わりの時に向かって急ぐ。人を欺くことはない。たとえ、遅くなっても、待つておれ。それは必ず来る、遅れることはない。

- 4 見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」

言葉の解説

■ハバククは前7世紀の終わりに南ユダ王国で活動した預言者。というのは、16に「見よ、わたしはカルデア人を起こす。…（彼らは）自分のものでない領土を占領する」とあるが、このカルデア人は新バビロニア（前7世紀後半に勃興）を指すからである。

2節 ■「いつまで」。3節冒頭の「どうして（＝なぜ）」とともに、嘆きの詩編を特徴づける疑問詞。■「助けを求めて叫んでいる」。これは動詞シャーヴァ。詩二二5が「主は：助けを求め、叫びを聞いてください」と述べるように、助けを求めて叫べば、聞いてくれるはず。だが、今は聞いてくれない。そこで「いつまで」なのか、「なぜなのか」と問い掛ける。

3節 ■「目を留めさせられる」。これは動詞ナーヴァトの二人称男性形。新共同訳はここでは使役的な意味だと見て、「あなたは労苦に目を留めさせる」と訳した。しかし、「あなたは労苦をずっと見つけるだけ（＝手をこまねいている）」と訳すことも可能。

2節 ■「走りながらも」。神からの使信を宣べ伝える伝令が、告知のために走っていても、読めるようにはつきりと書く。

3節 ■「もうひとつの幻」。何を指すのか不明。■「待つておれ」。これは動詞ハーハーであり、もととは「控えめで、持続する待機」を表す語。この語については、7頁の「言葉の広がり」を参照。

4節 ■「見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない」。直訳すれば「見よ、彼の魂は膨らんでいて、正しくない」。■「神に従う人は信仰によって生きる」。ハバクク書の頂点。パウロはこの句をローマ一17に引用している。

①ハバクク書は3章からなる短い預言書だが、内容から見ても、大きく二つの部分に分けられる。1―2章が第一部となるが、この部分では古い断片集を含む12―14の後に、五つの災いの歌(25―20)が加えられている。続く3章が第二部となり、神の顕現をうたう賛美の歌になっている。第一部の構成を示すと

- ① 12―4 預言者の嘆き―その一
- ② 15―11 主の応答―その一
- ③ 12―17 預言者の嘆き―その二
- ④ 11―4 主の応答―その二
- ⑤ 25―20 五つの災いの歌。

となる。今日の朗読は、①「預言者の嘆き」と④「主の応答」との組み合わせになっている。預言者の嘆きは、「いつまで」なのか、「どうして(なぜ)」なのか、という問いによって表されている(12―3)。新共同訳は、2節後半と3節後半を平叙文として訳しているが、むしろ前半部の疑問詞が後半部にも作用していると見て、どちらも疑問文に訳するのがよいかもしい。その場合、4節「律法は無力となり、正義はいつまでも示されない。神に逆らう者が正しい人を取り囲む。たとえ、正義が示されても曲げられてしまう」は、「いつまでか、なぜなのか」という疑問を生じさせる現実社会の描写である。

ハバククの目の前に広がる現実、律法(トーラー)がすたれ、正義(ミシュパート)が破れた社会である。そこでハバククは助けを求めて叫び、不法を訴えるが、神は聞かず、助けてくれない。しかも、正義がねじ曲げられた社会のもとで、ハバククは「災い」を見、「労苦」を忍び、「暴虐と不法」に耐え、「争いといさかい」に巻き込まれている。だからこそ、「いつまでか、なぜなのか」と問わざるをえない。

このような問いを神に向けるのは、ハバククだけではない。彼の同時代人エレミヤも同じように神に問い掛け

正しいのは、主よ、あなたです。

それでも、わたしはあなたと争い

裁きについて論じたい。

なぜ、神に逆らう者の道は栄え

欺く者は皆、

安穩に過(こ)しているのですか。

と訴えている(エレミヤ21)。エレミヤはまず「正しいのは、主よ、あなたです」と述べているから、絶対的な正しさの存在を信仰において認めている。しかし、「それでも、あなたと…：裁きについて論じたい」と続けるから、彼には納得できないことがある。それは「神に逆らう者の道が栄えている」という現実である。

エレミヤを苦しめる原因は、信仰と現実との遊離にある。このような場合、信仰を捨てて現実に流れることもできるし、逆に現実から目をそらして信心の世界に閉じこもることもできるが、エレミヤやハバククが選んだ道は、信仰と現実のどちらをも否定せず、「なぜですか」と神に問い掛けるという道である。

この問いに対する神の答えが22―4に語られている。神は無力なゆえに沈黙しているのではない。「たとえ、遅くなっても、待っておれ。それは必ず来る、遅れることはない」とあるから、神はちょうどよい時を待っているのである。そのときには、「高慢な者」の見込み違いが明らかになるから、「神に従う人」は今を「信仰によって生きる」という道を選ぶべきである。神に「いつまでですか、なぜですか」と問うことは、不信仰の現れではなく、むしろ信仰の表明である。信仰がなければ、現実に流れるか、現実に目をつぶって架空の世界に逃げ込むか、いずれにしても神から離れてゆく。キリストは神が示した最終回答だが、このキリストが心に

しっかりと生き始めるまで、私たちもこの問いを繰り返す必要がある。
②言葉の広がり。「待つておれ・ハ・ハ」。

この語は基本的には「控えめで、持続する待機」を意味する。まず①「待つ・とどまる」を表す。王下九3「油の壺を取って彼の頭に油を注いで言いなさい…そして戸を開けて逃げて来なさい。必ず必ずしてはならない」の傍線部はこの動詞の否定形である。報告を遅らせ、朝日が昇るまで「待つておれ」のはよいことではない(王下七9)。

次に②「攻撃のために」待ち伏せる」の意味にもなる。祭司の一団は「待ち伏せる」強盗のように、シケムへの道で人を殺す(ホセ六9)。

最後に③「待ち望む」を意味する。我らの魂は、助けであり盾である主を「待つ」(詩三三20)。民は御業を忘れ、神の計らいを「待たず」、荒れ野で神を試みた(詩一〇六13)。ヨブは死を「待つておれ」が、望みはかなえられない(ヨブ三21)。神に使われる用例もある。主は恵みを与えようとして民を「待つ」(イザ三〇18)。

今日の朗読では、③の用例に属するだろうが、「控えめで、持続する待機」といった意味合いも響いているかもしれない。

II 第二朗読(テモテへの手紙IIの1章6-8、13-14節)

6 そういうわけで、わたしが手を置いたことによつてあなたに与えられている神の賜物を、再び燃えたたせるように勧める。7 神は、おくびよりの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです。8 だから、わたしたちの主を証しすることも、わたしが主の囚人であることも恥じてはなりません。むしろ、神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを忍んでください。

13 キリスト・イエスによつて与えられる信仰と愛をもつて、わたしから聞いた健全な言葉を手本としなさい。14 あなたにゆだねられている良いものを、わたしたちの内に住まわれる聖霊によつて守りなさい。

III 福音(ルカ17章5-10節)

5 使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」と言ったとき、6 主は言われた。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言つても、言うことを聞くであろう。

7 あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰つて来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言つて者がいるだろうか。8 むしろ、『夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、わたしが食事を済むまで給仕してくれ。お前はその後で食事をしなさい』と言つてはなからうか。9 命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか。10 あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい。

言葉の解説

5 節 ■ 「使徒たち」。一七1では「イエスは弟子たちに言われた」と書かれている。イエスは弟子たちに「つまずきをもたらす者は不幸である」と語り、「兄弟が罪を犯したら戒め、悔い改めれば赦しなさい」と教える。ここでは「使徒たち」が登場して「信仰を増してください」とイエスに願う。「使徒」とは弟子の中の、さらに小さなグループを指すのであろう。「使徒(アポストロス)」はマタイ・ヨハネで一回、マルコで二回、ルカでは六回用いられている(六13、九10、一一49、二二14、二四10)。

6 節 ■ 「からし種」。一般に「からし種」はもっとも小粒の種子とされており、量と大きさに関して最小のものを表す比喻として用いられる(マタ一三31-32、一七20とその並行箇所参照)。

7節 ■「あなたがたのうち」。この「あなたがた」が5節に登場した「使徒たち」に限られるのか、1節に登場した「弟子たち」全体を含むのかによって、このたとえが向けられた対象が変わってくる。前者であれば、このたとえは教会の指導者の人物に向けられたことになる。 ■「僕」。主人が持つのはたった一人の僕である。彼は野良仕事のみならず、家の雑事も求められる。このたとえの主人公は僕である。10節 ■「命じられたことを」。9節の「命じられたこと」とまったく同じ語形であるが、9節の方は文脈により主人の命令である。9節でたとえは終り、10節はたとえの適用の部分であるから、この受動形は、神が行為の主体であることを婉曲的に表す受動形(神的受動形)であり、神に「命じられたこと」の意味。

①使徒たちが「今持っている信仰に加えて」信仰を増してください」とイエスに願った理由は書かれていない。今日の福音の直前で、イエスは彼らに罪を犯した仲間を赦すようにと教えているから(1-4節)、彼らは赦す原動力として信仰を求めたのかもしれない。イエスはその問いに「もしからし種一粒ほどの信仰があれば」桑の木を従わせることもできると答える。からし種は植物の中でもっとも小さな種子だと言われるが、育つと三メートルにもなることがある。イエスが種子にたとえて説明したのは、信仰が小から大に成長するということを認めているからであろう。

しかし、その信仰は「真の信仰」でなければならぬ。信仰はその大きさではなく、質が重要である。「真の信仰」であれば、たとえそれがからし種のように小さくても、信じられないほどの力を持つ。

イエスはここで信仰が持つ奇跡的な力を強調している。それは原文では「もし信仰があれば、桑の木は)言うことを聞くであろう」という表現が、「抜け出して海に根を下ろせ」という命令よりも先に起こっている動作を示す形であることからもうかがえる。しかし、「奇跡」が「真の信仰」のしるしだというのはない。パウロが「山を動かすほどの完全な信仰を持つよう」とも、愛がなければ……(1コリ13:2)と述べるように、「真の信仰」は「愛」と結びついている。イエスが強調しているのは、信仰の奇跡的な「力」であって、「奇跡」ではない。使徒たちが「信仰を増す」ようにとイエスに願ったことは、彼らがすでにながしかの信仰を持つていると自負していることを示している。しかし、その信仰はまだ「真の信仰」ではない。6節の「からし種一粒ほどの信仰があれば……」と言っても、言うことを聞くであろう」は文法的には奇妙な形である。帰結文は「事実と反する事柄」を表す形なのに、条件文は「単純な仮定」を述べる形だからである。単純な仮定として述べたのは、使徒たちを傷つけまいとするイエスの配慮かも知れない。イエスは非難しているのではなく、「愛に満ちた真の信仰」の重要性を伝えようとしている。

一日の仕事を終えて帰宅した僕は、さらに主人の食事を準備し、給仕をしても、主人からの感謝を期待できない。それは当然なことだからだ。キリスト者もまた善行を行ったからといって、神からの見返りを求めるべきではない、とイエスは教える。このたとえは一見、人間を操り人形のように扱う独裁者のような神を描いているかのようである。

しかし、10節「しなければならぬことをしただけです」の傍線部を直訳すれば、「行うことを負っている」となる。ここに使われた「負っている」という語は、ローマ13:8「互いに愛し合うことのほかに、だれに対しても借りがあつてはなりません」にも使われている。ローマ13:8は、隣人愛は神から受けた愛への応答だと見ている。人が隣人を懸命に愛することによって神の愛に応えようとしても、神からの愛を超えることはない。だから、隣人愛については借りが残ってしまう。このような見方を10節に当てはめると、キリスト者が奉仕や善行を「しなければならぬ」とは、イエスを通して示された神からの愛への応答だからだ、と言える。神は愛を欠いた独裁者ではない。

キリスト者は善行を行ってもその見返りを期待すべきではない。しかし、独り子を与えるほ

どに世に仕えた神がその愛を再び態度で示すときが来る。信仰は神の愛に気づくときに大きな力を得る。その力を使ってキリスト者はこの世の慎ましい活動家として生きる。

②言葉の広がり。「帯を締める・ペリゾーン・ニューミン」

この語は接頭辞ペリ(まわりに)と動詞ゾーン・ニューオー(帯を締める)からなる合成動詞だから「腰の)まわりに帯を締める」の意味である。長い上着を腰に帯を締めることによってたくし上げ、活動しやすくする風習から、この語は「腰に帯を締めて、仕事や活動に備える」ことを表す。

イエスは弟子たちに「腰に帯を締め、ともし火をともしいなさい」(ルカ二二35)と教えるが、傍線部を直訳すれば「あなたがたの腰が締められてあれ」となる。この言い回しは、すでに起こっている状態を継続せよ、ということを表す動詞形を用いている。しかし、続くルカ一二37「:はつきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる」では中動態だから、「自分で自分の腰に帯を締め」といったニュアンスになり、主人の自発性が強調されている。

今日の朗読でも中動態が使われており、主人に進んで仕えねばならない僕の姿が表されている。

IV 今日の朗読から

定められた時のために

イエスを見たいと思ったザアカイですが、背が低くて、見ることができなかったので、先回りしていちじく桑の木に登る。イエスは「その場所」に来ると、上を見上げて、「今日」ザアカイの家に泊まりたい、と語りかける。

出来事には「場所」と「時」がある。ハバククが「いつまでですか、なぜですか」と神に問うのは、救いとは言えない現状の中でそれを待っているからだ。神はそれに答えて、「定められた時」を待てと教える。

聖書の述べる「今日」は「昨日と明日の中間の日」のことだけでなく、「神の約束が成就する日」を表す。神との出会いの「今日」をもった人、あるいはそれを待ち望める人は確かに幸いである。

神の賜物を再び燃え立たせる

イエスがザアカイの家に入るのを目にした人々は、「あの人は罪深い男の家に入って宿をとった」とつぶやくが、ザアカイはそれを気にかけず、財産の半分を貧しい人に施すと誓う。

イエスは失われたものを「捜し」に来たが、そのイエスとの出会いが、ザアカイを深い喜びへと招き、「施す」と決心させる。

パウロが「神の賜物を燃え立たせる」ようにとテモテに勧めたのは、エフェソ教会を教え導かなければならないテモテが若さのゆえに軽く見られ、さまざまな困難に怖じ気づいていたからである。神から受けた賜物に気づき、そこに目を向けることが、私たちに生きる力を与える。

取るに足りない僕

ザアカイが財産の半分を施しても、また若いテモテが教会を立派に導いても、彼らは「取るに足りない僕です」と言わなければならない。

彼らがそうするのは、人前で謙虚さを示すが礼儀になかったことだからではない。彼らはまさに「取るに足りない僕」にすぎないからだ。

というのは、彼らの善行や成功は神から受けた賜物への返礼だが、この賜物に比べれば、彼らの行いは「取るに足りない」からだ。

聖書の述べる謙虚さは、人前で示すべきジェスチャーではなく、大きな賜物に出会った者がおのずと表す態度である。賜物を忘れれば、謙虚さもジェスチャーで終わる。